

令和6年度 第3回白馬高等学校学校運営協議会 議事録(概要)

1 日 時 令和6年(2024年)11月7日(木) 9時30分～11時30分

2 場 所 白馬高校会議室

3 出席者 委員 14名 以下敬称略

- ・相沢さつき(同窓会副会長)
- ・武田彰代(大町市立美麻小中学校講師、元白馬村教育委員長)
- ・太田伸子(白馬村議会議長)
- ・柴田友造(小谷村議会副議長)
- ・草本朋子(学校法人白馬インターナショナルスクール理事長)
- ・笹川陽子(スキー部後援会役員、め・ぞんど・ささがわ)
- ・白戸 洋(松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科教授)
- ・中村和彦(白馬村立白馬中学校)
- ・小林かおる(小谷村立小谷中学校長)
- ・丸山俊郎(白馬村長)
- ・中村義明(小谷村長)
- ・松澤 泉(白馬山麓事務組合事務局長)
- ・小林雄一(白馬高等学校長)

欠席委員

- ・松澤忠明(P T A会長)

その他の出席者

- ・井出敦(高校教育課高校再編推進室主幹指導主事)
- ・土橋邦彦(高校教育課高校再編推進室主任指導主事)
- ・小谷村副村長、白馬村・小谷村教育課長
- ・白馬山麓事務組合白馬高校支援係局長補佐、主査、白馬高校魅力化コーディネーター
- ・白馬高等学校教頭、事務長

4 次 第

(1) 開会の言葉(藤森要白馬高校教頭)

(2) 長野県教育委員会挨拶(井出敦高校教育課高校再編推進室主幹指導主事)

- 前回7月に行われた第2回学校運営協議会では、生徒の皆さんと直接意見交換を行った。高校の魅力化、部活動の在り方、施設等について生徒の目線から率直な意見を聞くことができたと考えている。
- 生徒たちの、白馬高校の魅力を話しているときの表情、目の輝きなどに、毎日充実した生活を送っているのではないかと感じている。
- 今年度も5月から生徒募集に向けて、学校関係者だけでなく、地元の方をはじめ、多くの方々に熱心に取り組んでいただいた。今月も今年度最後の説明会である銀座NAGANOで学校説明会が行われる予定。
- 新年明けての2月には前期選抜、3月には後期選抜が行われる。先日行われた予定数調査の結果を見ると、昨年度より多くの中学生が現段階で入学を志望している。予定数調査には県外生は含まれておらず、国際観光科においてはさらに多くの志望者が予想される。
- 毎年行われている高校生ホテルも大変楽しみ。白馬高校の魅力がますます多くの人たちに周知されることを期待している。
- 本日は株式会社プリマペンギンさんにご協力いただき、ワークショップも行われるとのこと。活発な議論が行われることを期待している。

(3) 学校長挨拶（小林雄一白馬高校学校長）

- 先月 24 日には、グローバル講演会としてスマートニュースメディア研究所の山脇所長をお招きした。情報との向き合い方、民主主義やメディアリテラシーに関する、長期的かつ客観的な講演をしていただき、貴重な機会となった。
- 前回の協議会以降、本校では強歩大会や 2 学年の修学旅行など、様々な学校行事や授業における活動を実施。これらの活動の様子は後ほど、学校からの報告として写真を交えながら説明する。
- 生徒募集に向けての本校の取り組みとしては、9 月 7 日と 10 月 19 日に本校会場にて 2 回の学校説明会を開催。県外 24 名を含む 41 名の中学生と 37 名の保護者、合計 78 名が参加。10 月 21 日には公開授業を実施。地元の方及び県内他地区の中学生、そして保護者の方が来校した。当日行ったアンケート結果は後ほど、報告させていただく。

(4) 報告事項

① 学校からの報告事項

<小林校長>

- 各行事や授業での生徒たちの様子について。資料 P 6～9 は、活動の様子をまとめた写真を掲載。P 6 上段は 7 月から 8 月にかけて行われたデュアル実習、下段には 9 月 24 日、高大交流時のもの。高崎経済大学地域政策学科のゼミナールの学生 12 名が来校し、「人生」をテーマに 1 年生を対象とした授業を実施。人生選択ゲーム、防災教育を含む内容で、年齢の近い大学生との交流は高校生にとっても大変貴重な経験となった。
- 資料 P 7、9 月 25 日韓国より 44 名の高校生が来校。本校 1 年生と交流を行った。本校の生徒からは学校紹介や断熱改修に関するプレゼンテーションを行い、その後、茶道、弓道、ボルダリング、バドミントンなどの文化交流を実施。韓国の生徒が積極的に質問する姿が印象的で、生徒たちはすぐに打ち解け合い、写真を撮り合ったり、LINE 等の交換をしたりしていた。文化体験や交流を通じて、日本と韓国の高校生同士が互いの文化を学び合い、未来に向けて貴重な友情を互いに築く良い機会となったと考えている。9 月 27 日には、秋晴れのもと、強歩大会を実施。生徒の出走率も高く、白馬の自然を体感しながら、各自の体力に合わせて最後まで完走。当日は P T A の方々に豚汁やおにぎりの振る舞いをしていただいた。
- 資料 P 8、10 月 1～4 日にかけて 2 学年の修学旅行が実施された。広島での平和学習やクラス別・班別での倉敷、大阪などの訪問を通じて、白馬とは異なる観光地の魅力や工夫を学んだ。
- 資料 P 9 は就労体験の様子。10 月 1 日と 2 日の 2 日間にわたり、地元 18 の企業・施設の協力のもと、1 年生が就労体験を行った。ほとんどの生徒が自分の進路希望に沿った事業所で実習することができ、積極的に取り組む姿勢が多く見られた。
- 資料 P 10～13 は、9 月、10 月に行った学校説明会のアンケート集計結果についての報告。P 10、11 は、本校で行った学校説明会に参加した中学生の回答集計。P 12、13 は中学生保護者の回答の集計結果。
- 中学生の参加者は 9 月、10 月を合わせて 41 名。その内、県外生は 24 名。約 59%を占めている。今年度も、県外生の国際観光科への興味・関心の高さがうかがえる結果となった。白馬高校を知ったきっかけとして多くあげられた回答は、学校のホームページや地域みらい留学の説明会。学校説明会参加の動機としては、白馬高校でスキー競技を続けたい生徒や、特色のある授業に関心を持っている生徒が多く、約 72%の生徒が国際観光科に興味を持っている結果となった。卒業後の進路希望については、4 年制大学進学を考えている中学生が多い傾向。「白馬高校に入学をしたいと思うか」という問いに対しては、約 68%がこの段階で「思う」「どちらかという思う」と回答。
- 保護者の「本校を知ったきっかけ」としても、ホームページや地域みらい留学での説明会が多い結果となった。約 78%の保護者が国際観光科に興味を持っており、「白馬高校に入学させたいか」という問いに対しては、約 72%が「思う」「どちらかという思う」と回答。
- 生徒募集に向け、引き続き、個別の学校見学等の要望にも積極的に対応していきたい。
- P 14、15 は公開授業に関するアンケート結果。授業については、「タブレットやスクリーンを使った授業が進んでいて驚いた」、「生徒が楽しそうに授業を受けていて良い印象を受けた」などの声や、2 年の選択授業や北アルプス学について「それぞれに興味を持った内容を深く学べる特色

のある授業が良い」との評価をいただいた。一方で、公開授業の周知方法として、学校のホームページだけでなく、在校生への連絡方法である「オクレンジャー」や両村の広報にも載せてほしいという提案もあり、今後の改善点として検討していきたい。その他、「生徒の挨拶が明るく気持ちが良い」、「校舎が清潔で雰囲気がよく、集中して学べそう」といった学校生活に対するポジティブな感想も多くいただいた。

- P16、北アルプス地域振興局による本校の魅力発信事業についての報告。白馬高校独自の魅力を伝えるため、北アルプス地域振興局企画振興課の協力のもと、CM制作を行う。学校の特色ある多様な授業や学校生活の魅力を、大町市、白馬村、小谷村のケーブルテレビを通じ放送。地元住民へのアピールを図りたいと考えている。白馬高校のYoutubeチャンネルやオフィシャルPVの検索案内も提供し、特に普通科への入学者増加を目指したい。放送と制作スケジュールは、授業の中でCMを生徒たちが撮影し、実際の放送は12月から1月辺りを計画している。

② 今年度の生徒募集活動について（白馬山麓事務組合）

<松澤局長>

- 全国募集の状況について。7月21日の体験入学で35組、9月、10月の学校説明会では27組、合計62組が寮見学を行った。
- 地域みらい留学の活動では、オンライン単独開催で63名、合同開催で69名、合計132名が視聴。対面では、6月東京開催で56組、7月大阪開催で17組、8月東京で54組、計127組に説明を実施。白馬高校の説明に訪れた方が一番多く、「説明もよかった」というアンケート結果が開催事務局から届いている。
- 銀座NAGANOでの説明会は、今まで3回行い、21組に対応。その他、県外の中学校へ訪問し、進学先の一つとしていただくよう案内する活動を行っている。
- 今年度の特徴は、「どうしたら高校に入れるか」などの進学や受検内容に関する質問が多い印象。
- グローバル講演会では、スマートニュースメディア研究所の山脇氏を招いた。フェイクニュースなど紹介を交えながら話していただき、最後には生徒6名ほどの班に分かれてワークショップを実施。架空の内容を用いて、週刊誌や広報誌の記者に扮し、たくさんの人に読まれるための記事の見出しづくりを行った。
- 資料P3、ワークショップについて。白馬高校支援事業では全国募集をするにあたり、地域案をまとめ、地域案に沿った業務計画、事業を続けてきた。白馬・小谷村では、「地域に根差しながら世界に通用するグローバル人材づくり」を目指し、高校支援を行ってきた。また、高校では「地域と密着した探究的な学び」を目標に掲げ、学校づくりを進めている。魅力化プロジェクトを立ち上げた当初はビジョンが一つにまとめられておらず、それぞれが個別に一生懸命活動してきた経緯がある。今後は一つの頂上に向かって、地域と高校が協力をしながら「グローバルな人材育成」に向け、地域一体となって取り組む必要がある。そのためのビジョンを一つに取りまとめていきたいという思いがあり、今回ワークショップを用意させていただいた。今年度のワークショップは、株式会社プリマペンギンノ協力のもと、プロジェクトビジョンを策定していきたい。

<白戸会長>

- 意見・質問等があればお出してください。

<丸山委員>

- 普通科への入学希望者が少ないというのが現状。銀座NAGANOなどの説明会で、Zoomを活用して我々が参加し、普通科のプロモーション活動をするのもよいかと思う。
- 国際観光科に入れなかった志望者を普通科で受け入れる機会を設けるなど、柔軟に対応していくのもいいのではないか。
- 先日、村の文化祭にて「出張村長室」を実施。高校生と話す機会があり、意見として「機能性の高いストーブが欲しい」という意見があがった。同時に、以前から切実な願いとして届いているトイレに関しても改善されていないとのことだったので、とりあえず報告まで。

<草本委員>

- 11月30日に白馬高校断熱改修ワークショップが行われる予定。2020年から始まった活動で、県でも補助金等の用意があると聞いており、素晴らしいと思う。今後、進められる大規模修繕と同時に、トイレの洋式化やファンヒーターへの切り替えなども行っていけるといいと思う。

○ファンヒーターは灯油を使うことになるので、できれば化石燃料を使わないペレットストーブの導入を検討してもらえると嬉しい。

<井出主幹指導主事>

○中間改修の説明が前回の運営協議会であったと思うが、今年度は設計業務を行い、いよいよ来年度から改修工事が始まっていく。学校からの要望を中心に、施設整備を行っていく予定。

(5) ワークショップ

<小野（株式会社プリマペンギーノ）>

○今回の白馬高校魅力化プロジェクトビジョン策定ワークショップでは、多くの意見・アイディアを寄せていただきたい。

○高校には教育目標やスクールミッション、スクールポリシーなどのすでに決まっているものがあるだろうし、運営協議会でも、これまでビジョンに関する提言書をまとめる活動を行ってきたと伺っている。そうした中で、今回のビジョン策定では新たに別のものを作るのではなく、視点を変えて、今までの流れを汲みながら取りまとめていく活動になることを理解していただきたい。

○今回のワークショップのターゲットは、高校魅力化プロジェクト全体を指すビジョンをつくること。学校で過ごす時間のみならず、放課後や土日、寮での生活などを含めた高校3年間、高校生活全体の暮らしをまとめた魅力化プロジェクトのビジョンづくりとなるため、視点を少し広くして、考えていただきたい。

○白馬高校魅力化には、両村関係者、小・中学校、寮、公営塾、コーディネーター、地域の方々など、本当に多様な方々が関わり合っている。そうした関係者それぞれがビジョンを目指して、「どういったタスク・役割を担っていくのか」、「一人一人が何を行っていくのか」というところまで、今年度取り決めができればと思っている。目指す姿を決めるだけでなく、そのために、「誰が」「何をするのか」まで考えていきたい。

○株式会社プリマペンギーノについて。東京に本社を置いており、「社会を一步先に進める」会社理念の下、主に2つの事業に取り組んでいる。一つ目は、教育魅力化プロジェクトに取り組んでいる自治体の運営の支援。これまで全国で52自治体、66校ぐらいの小中高を支援してきた。二つ目は教育コンテンツを開発する事業。起業家育成プログラムやSTEAM教育、私立大学の魅力化などにも関わっている。

○魅力化プロジェクトは存続を目指す主旨で始まったプロジェクトではあるが、「存続を目指す学校」よりも「魅力的な学校」に生徒は行きたい、保護者は行かせたいだろうという考えを踏まえ、「魅力化プロジェクト」と呼ばれている。「他校との差別化をどう行うのか」、「何を付加価値として磨いていくのか」という視点から魅力づくりをしていくのが、高校魅力化プロジェクトであると弊社は考えている。

○ビジョン策定の重要性は、各地域で話題となっている。白馬高校魅力化プロジェクトは2015年に始まっており、全国的にも老舗と言える。同じく最初の頃に始まった他の自治体も、改めてビジョンを考え直すフェーズにきているところが多い。多様な人たちが関わる中で、「一つの山を決めないとなかなか登れない」または「登り方を見直さないと」という状況にある。

○魅力化プロジェクトの推進を実現していくために大事なことは3つあると考えられる。一つ目は、目指すべき状態を決める。登山で例えるなら、「山頂を決める。どの山を登るのか」ということ。二つ目に「どのルートで登るのか」を決めること。最後に、「登れる人を集める」ということ。人や体制が整っていないと、どうしても夢が叶わないこともある。「どういった体制で推進していくのか」が大切。今年度、そうしたところの取り決めまでお手伝いできればと考えている。

○白馬高校は全国的に先進的な事例であり、視察も多くあると思う。全国募集ではトップクラスの人数を集めており、成功している事例と言える。ただスタッフの人数で言うと、他地域に比べ、非常に少ない人数体制で運営している。他地域では、公営塾だけで4、5名、コーディネーターが2、3名、ハウスマスターを配置するなど、人材確保を行ったり外部に委託したりして運営している学校が多い。推測ではあるが、白馬高校の先生や支援系の業務負担は非常に大きいと思う。今年度、方向性を見出していく中で、「どういう体制で誰が何をするのか」という大事なところまで一緒に考えさせていただければと思う。

○ワークショップを実施する際の視点について。隠岐島前高校魅力化プロジェクトの中でよく用い

るのが、「ありがたい姿」、「なりゆきの姿」。『意思ある未来』と『なりゆきの未来』のどちらを指すか」というのが、海士町の合言葉となっている。過去に倣って、現状維持を続ける先にあるのが「なりゆきの未来」。そうではなく、「そもそもどのような地域にしたいのか」というありがたい姿を描き、それに対する「育みたい人材像」を考えていくのが「意思ある未来」。つまり未来から逆算をしていくという考え方。今回のワークショップは、そうした「未来を想像する」ところから始めたい。

- 1回目のワークショップは白馬高校生を対象に行った。1年生から3年生、11名が参加。詳細は後ほど共有。
- 白馬高校魅力化プロジェクトの現状とこれまでに見えてきた方向性を確認。現状は国際観光科の方が人気が高い。地元の中学生在が近隣の進学校等に流出している状況も見られる。こうした現状も踏まえ、ビジョンや目的を改めて考えるフェーズにきていると考えられる。方向性はこれから検討していくが、まずは「体制を整えること」と「地元から進学を増やす」ことに力を入れるとよいと思う。
- 「どのような方針を取りまとめていくか」について。まずは「どのような人を育むのか」が一つのキーワード。そして、「そのためにどんな力の育成に注力するか」、「どのような特色ある学びに注力するか」。学びを確かなものにするために「コアとなる活動として何を行うのか」。最後に「それらをどういう体制で誰がいつ行って叶えていくのか」。こうした方針を決めていければと思う。
- 他地域の事例紹介（加賀市、飛騨市、隠岐島前）。3つの市で共通していることは、「ストーリーを持ってビジョンを掲げ、段階的なステップ、体制やスケジュールをきちんと持っている」ということ。特に飛騨市の「学園構想」、隠岐島前高校のある海士町の「魅力化構想」は、地域との多様な関わりを交えながら、どういったビジョンに取り組んでいるのかが示されている。
- 加賀市の学校教育ビジョンでは、「Be the Player」がキャッチコピー。「自分の考えを多く生み出す、社会を変える」ことを目的に、時代の変化に合わせて4つのプロジェクトを提示し、小中の12年間の学びに取り組んでいる。
- 飛騨市学園構想は、地域教育魅力化プロジェクトとして2年ほどかけてビジョンづくりを行い、プロジェクト推進にあたっている。ビジョンの図が分かりやすく、一番上に「どんな人材を育むのか」を明記、一番下には「創りたい地域像」つまりありがたい地域の姿が描かれている。保育園から高校までの間でどういった力を育むのかを段階的に示している点も非常に分かりやすくなっている。市の学園構想であるため、学校のみならず、「みんなで育て、みんなが育つ、魅力あるまちづくり」として教育を軸に進めている。学校での取り組み、家庭での取り組み、地域での取り組みをイメージマップとして紹介し、いろいろな人が教育に携わっていくことを目指している。生涯学習も合わせて進められ、「大人もチャレンジする」ことを目標に、大人の学びにも取り組んでいる。
- 島根県隠岐島前高校のある海士町のビジョン、取組も変わってきている。これまでの目的は「高校を基軸とした島前地域の学校と地域の永遠の発展」、必須目標は「永遠の発展に向けた2学級の継承・進化」とし、あくまでも「学校」を軸として、地域の発展のため2学級を維持することを目標としていた。しかし今年度9月に発表された第4期隠岐島前教育魅力化構想では、「高校を基軸として」という言葉がなくなり、「学校と地域の永遠の発展」から「教育と地域の永遠の発展」へと変更。必須目標も、「2学級の継承・進化」という言葉は消え、「島前で教育に関わる人たちの対話によって掲げる」となり、高校に限らず、小中高、そして地域全体での取り組みへと海士町も切り替えているように思う。
- こうした流れの中、新しい学びも始まっている。例えば、高等学校DX加速化推進事業。文部科学省もかなりの予算をつけ、1校当たり1000万、全国で1000校ほど採択されている。DXハイスクールと呼ばれ、Society5.0というテクノロジーが進化する社会の中で、数学のデータ分析、データサイエンス、デジタルものづくり、プログラミングなどの学びが高校でも必要であるという考えのもと、進められている。デジタル等の成長分野への大学進学、就職、産業の担い手の増加を目指し、文部科学省が推進している事業。白馬高校も採択され、取組を進めていると聞いている。全国では、探究の授業で数理やデータサイエンスを行ったり、AI、STEAM教育などを取り入れたり、普通科でも学びを推進する事例が挙がってきている。
- （ワークショップ導入として）白馬村、小谷村の中高校生及び保護者アンケート結果を一部紹介。

「2040年の白馬村・小谷村がどんな村になってほしいか」という問いに対し、生徒からは「自然環境を保つ」、「交通の利便性の向上」、「観光業のさらなる発展」、「人口の増加」、「公共施設の充実」といった回答が見られ、暮らしやすい未来を望んでいることが分かる。同様に保護者の回答でも、「住みやすい」、「自然環境」、「活気」などがキーワードに上がっている。「投資目的」、「外国資本」などの大人目線での気になる言葉も見られるが、おおむね、住民の方は、観光客に魅力的で住みやすい環境、豊かな自然、そして地域経済の発展や雇用の充実、交通の改善、子育て支援や福祉の充実などを望まれていることが読み取れる。

- 「将来どのような力を身につけたいか、身につけさせたいか」という問いに対し、「コミュニケーション力」、「学力」、「英語力」、「社会性」、「協調性」、「自立」などの言葉が多く見られた。将来に向けてコミュニケーション能力や学力、特に英語力、そして自立心、自ら学ぶ力、社会でこれからの生き抜く力、自己成長や協調性といったものを望んでいることが見てとれる。
- 10月に開催した高校生ワークショップについて。1年生から3年生まで、11名が参加し、1時間半にわたりワークショップを行った。内容は主に「白馬・小谷地域の未来を想像する」、「理想の白馬高校・高校生活を想像する」の2つ。まだ意見等を整理中の段階ではあるが、一部紹介させていただく。
- 「理想の白馬・小谷地域の未来の姿は」という問いかけに対する回答は、「有言実行できる人がいる」、「楽しく暮らせる」、「自然を守りつつ豊かな生活を送る」など。「日本人も住みやすい。かつ自然多め」、「環境に優しい」など自然環境に触れる意見や、「グローバルな人がいる」などの多様性を求める声、「学生が集まる場所がある」や「遊べる場所が増える」などの高校生らしい意見も。その他、「世界大会を多く開催する」、「食が豊富」、「登山者がたくさん」といった、具体的に未来を描いている様子が見てとれた。
- 「理想の白馬高校・高校生活は」という問いかけに対しては、「楽しい」、「自由」などのキーワードや「多様性」という言葉が見られた。体育館やトイレなどの設備に関する意見もいくつか挙がっていた。「目標に向かってみんなで頑張れる部活」、「部活の種類を増やす」など、部活の充実を望む声も多く聞かれた。「地元生徒の増加」を求めると同時に、外国人や他県からの入学者も期待している様子。その他、「国際観光科を2つのクラスに分けたい」、「留学したい」、「国際交流を増やしたい」など国際的な学びに触れるものも見られた。

<ワークショップ実施>

ワークショップの流れ

- ① 問いかけに対し、一人一人がアイデアを付箋に書く。
- ② 付箋を模造紙に貼り、グルーピング（カテゴリーで分ける）を行う。
- ③ それぞれのカテゴリーに見出しをつける。

問いかけ1 2040年の白馬村、小谷村のありたい姿はどんな姿か。

- ・どのような状態なのか ・どんな生活や暮らしなのか
- ・どんな学校があるのか ・子どもたちはどういう生活をしているのか
- ・地域はどんな様子なのか ・環境や自然はどうなっているのか
- ・どんな産業が発展しているのか ・どんな人が集まりどんなことをしているのか など。

問いかけ2 白馬高校及び高校生活の3年間で育みたい力とは何か。

- ・どのようなスキルや能力がある人を育むのか
 - ・どのような心構えやマインドを持つ人なのか など。
- ※学校内での授業のみならず、放課後や公営塾、寮での生活、地域での活動を含めた、高校生活全体を想定

問いかけ3 育みたい力をつけさせるために高校で取り組みたい学びや活動は何か。

（登山やスポーツなどの具体的な活動、文化交流的なもの、断熱材改修などSDGsに関するプロ

ジェクト、地域でのボランティア・体験、学び方・教育手法など)

※学校内での授業のみならず、放課後や公営塾、寮など広い範囲での学びを想定

<小野>

○たくさんの意見・アイデアを共有していただいたことをありがたく思う。高校生ワークショップでの意見、両村の中学生・白馬高校生・保護者対象のアンケート結果、これまで作成されたビジョンに関わる提言、スクールポリシーやスクールミッションなど、様々なものを踏まえながら意見をとりまとめ、ビジョン査定を進めていく。たたき台として意見を集約したものを年明けに報告、さらに協議会で修正を行っていただき、最終的にビジョン策定ができればと思う。

(6) 県教育委員より

<井出主幹指導主事>

○県教育委員会では、昨年度1年をかけて特色ある県立高校づくり懇談会を行い、県立高校の特色化に関する方針を今年9月に発表。白馬高校では、特色化、魅力化をすでに何年も前から取り組んでおり、先駆的だと思う。今回のワークショップも、今ある白馬高校の魅力に磨きをさらにかけていくためには、大変良いきっかけになったのではないかと感じている。これから高校入試が本格化。引き続き、魅力ある高校づくりを一緒に考えていきたい。

<白戸会長>

○10年ほど前に飯田市で「地域人教育」が始まった。リニアができることによって若い人が都会に流出し、地域が衰退していくことを懸念した市長や地域住民が課題を共有し、「どうすればよいか」、「どういう人材を育成すべきか」を考え始めたことがきっかけだと記憶している。今回のワークショップでも、まずは「地域の在り方」を考えた。また、自分の留学時代を振り返って、今でも覚えているのが、「教育が地域を変えるのではない。地域の在り方が教育を変えていくのだ」という言葉。ここ数年の協議会を見てみると、まさにそうした動きになってきていると感じ、大変心強く思う。

(7) 閉会の言葉

○今年度最後の協議会は、第4回を2月17日(月)に開催予定。

以上で、第3回学校運営協議会は終了。